



もしもし念仏

ご院^{えん}さん^{*注}がオシナばあちゃんのお宅にお参りに行きました。オシナばあちゃんは九〇歳を超えておられます。お家^{うち}の方はお留守^{るす}で、ばあちゃん一人でした。そこで、ご院さんがばあちゃんに代わって、お灯明^{とうみょう}を点けはじめました。

そのとき、電話が鳴りました。「どれ、よつこらしよ」と立ち上がったばあちゃんは、電話の方に向かっていきます。田舎^{いなか}のお家は広いので、電話までは部屋三つ分ほど行かねばなりません。けれども、ばあちゃん

の足取りは、ゆつくりゆつくりです。

お灯明を点け終わったご院さんは、お仏壇の前に座りましたが、電話の音はまだ鳴っています。ばあちゃんは、ゆつくりゆつくり電話に向かっているでしょう。ご院さんは、お念仏を称^{とな}える準備をして手を合掌^{がっしょう}しながら、うしろの様子を気にしていました。電話の音が途絶えるのが先か、ばあちゃんが電話に行き着くのが先か。

(もう切れるぞ、もう切れるぞ。ばあちゃん急いで！)
いつの間にか、ご院さんは心の中で応援をしています。

そして、もう切れてしまうとされた、その瞬間、「カチャ」と受話器を取る音が聞こえました。

(ばあちゃん間に合ったか!?)
とご院さんが思ったとき、ご院さんの身体は、すでにお仏壇に向かってお礼をし、今まさにお念仏を称えようと声を出す態勢に入っていました。